
鞆

akuma

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鞆

【Nコード】
N4751L

【作者名】
akuma

【あらすじ】
その傷だらけの鞆は私のお気に入り、それ一品しかこの世に存在しない物だった。
私は哀れな姿になった鞆を目の前にして、ため息をついた。

駅の改札を抜ける時必ず、肩に掛けた鞆の同じところを擦っている。十数年同じところを同じように擦っていると結果は見えている様なものだ。でも、その傷だらけの鞆は私のお気に入り、ワインレッドに染められた牛革のビジネスバッグはそこら辺には売っていない。結婚した時、旦那が就職祝いに、職人さんに依頼した注成品で、それ一品しかこの世に存在しない物だった。

傷をクレヨンで補修したりしてだましました使っていたが、とうとう穴が開いてしまった。私のヘビイローテーションのおかげで、皮もくたくたになっている。

男性が使う鞆のようにカチツとした四角い鞆ではなく、少し曲線を帯びた台形をしていて、手提げの部分が長く肩に掛けることが出来る。A3サイズのファイルが入るといふ大きさだが、丸みを帯びたデザインが、それを感じさせない。

『べっしよつか』

私は哀れな姿になった鞆を目の前にして、ため息をついた。

前の旦那に聞いたその鞆の作り手は京都にいた。電話してみたが、『・・・現在使われておりません・・・』というアナウンスが空しく流れる。

私は住所を頼りに、その場所に訪ねて行く事にした。

四条河原町で阪急電車を降り、京阪に乗り換え、鴨川沿いの景色を眺めながら出町柳まで。

貰っていた住所を頼りに十分ほど歩いたところにその家があった。

表には「乾鞆」とだけ小さな看板があつた。普通の木造家屋で玄関は格子戸になっており、うす暗い石畳の土間の奥が覗けた。私はその格子戸の前に立ち、

「じめん下さい」

と声を掛けた。何も返事が無い。もう一度大きな声を出して呼びかけてみた。しばらくして奥から足音が聞こえてきた。格子戸を開けてくれたのは、30代半ばと思われる男性だった。

「あのこの鞆なんですが……」

と言いながら、私は持ってきた大きな紙袋からその鞆を出して見せた。しばらくその鞆を吟味していた彼は、

「これは親父の作ったもんです」

と言った。

「お父様の作品だったんですね。良かった。これ、修理は可能でしょうか」

と、安堵の気持ちを込めて、私は言った。しばらく黙っていた彼は、

「親父は五年前に亡くなりました」

と申し訳なさそうに言った。私は

「えっ、それは……」と愁傷様です

とかろつじてお悔やみの言葉を言うのが精一杯だった。

五年前、この鞆を作った彼の父親はこの家で独り、息を引き取った。その二年前に彼の母親である奥さんを亡くし、彼の勧めを断わって独りで暮らしていた時のことだったそうだ。彼が一週間振りに覗くと、仕事場で倒れていた。脳溢血だったらしい。

また、じっくりと鞆を見ていた彼が言った。

「僕が修理させて頂いても良いでしょうか？親父の仕事場を使って僕が鞆の製作をしています。まだ一年と少ししか経ちませんが」

彼は、一年ほど前に、この実家に戻って来て、父親の仕事を引き継いでやるうと思っただけだそうだ。

「こんなになるまで使っていたらうえに、修理して使いたい、とおっしゃる。親父が生きてたら、きつと喜んでいたでしょう。是非、僕に修理させて下さい」

彼の気持ちは十分に私にも伝わった。私は彼に修理を依頼した。

「鞆、出来上がっております」

という連絡があったのは、あれから一月近く経った頃だっただろうか。宅急便で送りましょうか、というのを断わって、私は引き取りに行く事にした。

その家の格子戸の前で、「ごめん下さい」と声を掛けると、すぐに女の人が出てきた。

「あのー、飯田と言いますが、鞆の修理が出来たと聞いてきました
が……」

「あつ、はい、すぐに主人を呼びます」

そう言つて、その女性は、小走りに奥に引つ込み「あなたー、女神様がいらしたわよ」と言っているのが聞こえた。

鞆の修理を依頼した彼は、油紙に包まれた鞆を持って、すぐに現れた。鞆はまるで新品のようになっていた。

「すごい。とても素敵だね。ありがとうございます」

「いえ、大変勉強させて頂きました。こちらこそありがとうございます
ます」

「さつき、奥様が女神さま、て言つてらしたけど、それって私のこ
とかしら」

どうしようかと考えているように黙っている彼の横で、奥さんが口
を開いた。

「すみませんね唐突に変な事を言つて。先日この鞆の修理を依頼さ
れてから、主人はものすごくやる気が出たんだそうです。それまで
こんな手作りの鞆が世の中に受け入れられるか、自分でも半信半疑
なところがあつたのに、このお父さんの鞆を見て、発奮したんです
よ。おまけに、あれからどんどん注文が飛び込んできて、烏丸に
あるお店にうちの鞆を置いてもらえる事にもなつたんです。だから
お客さんは幸運の女神様だつて主人は言うんです。こんなお綺麗な
方だとは私も知りませんでした。確かにお客様は女神様ですね、主
人が言うのも無理ないと思いました」

無口な彼を補うには十分な奥さんの話に、私は納得した。

注文が入ってきたのは偶然だとしても、彼の父親の仕事が、彼自身を発奮させた事は確かなんだろう。前回来た時に較べて、目の輝きが違って見えたのは、私の錯覚ではないと思った。

今朝も、ワインレッドの鞆は、私の左肩に掛かり、揺れている。
この新しく蘇った鞆と共に、自分がりセットされたことに感謝している。

b y 杏子

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4751/>

鞆

2011年1月19日21時36分発行